



TITLE:

ベルクソン『試論』における「持続」の一と多

AUTHOR(S):

山根, 秀介

CITATION:

山根, 秀介. ベルクソン『試論』における「持続」の一と多. 宗教学研究
室紀要 2013, 10: 127-148

ISSUE DATE:

2013-11-29

URL:

<https://doi.org/10.14989/179574>

RIGHT:

ベルクソン『試論』における「持続」の一と多

山根秀介

Le problème de l'un et du multiple de «durée» bergsonienne dans "Essai"

Shūsuke YAMANE

Dans la longue histoire de la philosophie occidentale depuis la Grèce antique, de nombreux philosophes ont discuté sur le problème complexe de l'un et du multiple. Ce problème concerne l'ontologie, c'est-à-dire la philosophie première, et est un des problèmes les plus importants pour le historien de la philosophie.

Cette étude vise à saisir la «durée» bergsonienne dans "*Essai sur les données immédiates de la conscience*" sous l'angle de l'un et du multiple, et à définir leurs rôles et leur relation réciproque. L'«unité» nous servira alors de notion-clef. La durée bergsonienne est une unité qui forme sa propre totalité, et elle est en même temps constituée d'unités qui sont ses propres éléments. L'un et le multiple que Bergson considère comme réels et propres à notre durée sont inséparables, ils sont les deux côtés de la même pièce. Ainsi on ne peut traiter un seul des deux moments de la durée, et on ne peut donc pas considérer la théorie de la durée soit comme un monisme soit comme un pluralisme. Les multiples de la durée sont en eux-mêmes indivisibles et hétérogènes. Les unités changent sans cesse et font partie de la durée entière, en même temps qu'elles composent, en se pénétrant, la durée entière, qui est elle-même une unité et qui évolue elle aussi perpétuellement.

はじめに

古代ギリシア以来の西洋哲学の歴史において、多くの哲学者が様々な形で「一と多」という問題について議論を展開してきた。それは世界をいかなる相貌のもとに捉えるかという、人間にとって根本的な態度に関するものであり、また第一哲学たる存在論に関わるものであって、哲学史上最も重要な問題の一つである。本論文では、アンリ・ベルクソン（1859-1941）の哲学の根幹である持続の存在論を、「一なるもの」と「多なるもの」を巡る問題系という角度から捉え直し、彼の存在論において一と多が果たしている役割について、また両者の関係について、彼の第一の主著『意識に直接与えられたものについての試論』（1889、以下『試論』）の記述を中心として解明することを目標とする。

ベルクソンはこの問題について、「全く純粋な内的持続、つまり統一でも多性でもなく、私たちのどのような枠にも入り込まない連続性」（PM4）と言い、「自我が多性であるとか自我は統一であるとか、あるいは両者の総合であるとかいったことを述べることもより容易なことではない。統一と多性はここでは対象に即して裁断する必要がない表象、すでに作製されているような表象、山積みになされた中から選ぶだけでよい表象、つまりそれらはピエールの形もボールの形もかたどっていないから両者のどちらにも合うような既製服である」（PM196）と言う。またその一方で、「私たちの持続の展開は、ある面では進行する運動の統一性に似ているし、また他の面では広げられた諸状態の多性に似ている」（PM185）とも述べる。これは矛盾ではない。持続は一でも多でもないと言われるとき、それによってベルクソンが意味している一と多は、すでに出来上がって固定されてしまった概念としての一と多であり、思弁が抽象によって作り出したような空虚な一と多である。それに対して持続は一かつ多であると言われるとき、それによってベルクソンが意味している一と多は、生きられた持続の本性である一と多であり、経験によって意識に直接与えられるものとしての一と多である。

そうであるならば、ベルクソンが実在的と考え、意識に直接与えられる一と多がそれぞれどのようなものであるか、そしてその一と多がともに持続の本質として共存するということがいかなる事態であるのかということが問題となるはずである。ここでの議論を導く鍵となるのは「ユニテ unité」の概念である。本論で詳しく述べるように、ベルクソンの言う持続は一つの統一体としてのユニテであると同時に、また単位としてのもろもろのユニテによって構成されるものである。持続をこのユニテという観点から捉え直すことによって、そこに立ち現れる一と多の特異なあり方を探ることが本稿の試みである。

第一章 二つの「ユニテ」について

議論の出発点として、『試論』第二章冒頭における「ユニテ」についての議論を検討する。ここは『試論』でもとりわけ難解とされる箇所であるが、本稿の立場からすると、このユニテはベルクソンの考える持続がいかなる構造によって成り立っているかを解明するためには極めて重要な、核となる概念である。したがってまずはここでユニテがどのような性質のものとして考えられているかを確認し、然る後にそれをもとにして、持続の統一、持続の多性という問題に着手する。

よく知られているように、ベルクソンは『試論』で二種類の多性——数的多性と質的多性——を区別し、それぞれを詳細な議論にかけけるわけであるが、その準備段階として彼は数を分析することからはじめる。そこで重要な役割を担うことになるのが、先ほどから述べている「ユニテ unité（単位／（単）一性／統一）¹」の概念である。まずベルクソンは、「単位の集合として、あるいはもっと正確に言えば、一なるもの（l'un）と多なるもの（le multiple）との総合」（DI56）という数の一般的定義を持ち出し、ここにさらに独自の分析を加えていく。しかしベルクソンによれば、数を諸単位の集合とするだけでは十分でなくて、「これらの諸単位は互いに同一である、あるいは少なくとも、それらが数えられる以上同一と想定せねばならない」（DI57）という定義をさらに加える必要があると言う。たとえば私たちが羊の数を数えるとき、羊たちが一匹、二匹、三匹……と数えられるには、あの羊とこの羊とがそれぞれ同じ羊として想定されていなければならない。そのときには一匹一匹の羊が有する個体差は無視されており、すべての羊が一般的な概念としての「羊」という枠に押し込められることになる。あの羊もこの羊も、一度羊として数え上げられてしまえば同じ羊である。「したがって数の観念は、互いに絶対的に類似した多くの諸部分あるいは諸単位についての、単純な直観を含むと言えるだろう」（DI57）。ベルクソンはこのようにして、数の観念に含まれているこの諸単位の相互同一性という表象を明らかにする。

さらに彼はこの地点に留まらず、ユニテにさらに踏み込んだ考察を加えていく。以下の引用を検討してみよう。

数は一であると主張するとき、私たちがそれによって意味しているのは、私たちは精神の単純で不可分の直観によって、それを全体において表象しているということである。したがってこのユニテは、一つの全体のユニテである以上、一つの多性を含んでいる。しかし私たちが数を構成する諸ユニテについて語るとき、これらの諸ユニテはもはや総和ではなく、還元不可能な純粋で単純な諸ユニテなのであり、これらは互いに無際限に構成されることで数列を与える定めにあると私

たちは考えている。(DI59-60)

次のような二種類のユニテがあるように見える。一つは決定的な (définitive) ユニテであり、これは自分自身に自分自身が付け加わることによって数を形成する。もう一つは暫定的な (provisoire) ユニテであり、それ自体において多 (multiple) でありながら、自身の統一性を、それを知性が認知する際の単純な働き (acte) から借り受けている数のユニテである。(DI60)

ここでは二つのユニテが考えられている。一つは決定的なユニテと言われるもので、それ自体単純で不可分で、それが積み重ねられることによって数が形作られるようなユニテである。もう一つは暫定的なユニテと言われるもので、多を含みながらも全体として一つの数として表象される。先の羊の例を用いれば、決定的なユニテとは、50 匹の羊の群れを構成しているところの、一匹一匹不可分な各々の羊と言うことができるだろう。そして暫定的なユニテとは、5 匹で一まとまりにされた羊の群れである。5 匹の羊の群れが 3 つある、などと言われるとき、それぞれの群れが実質的には 5 匹の羊を含みながらも、一つのユニテとして考えられているのである。二つのユニテの違いはさしあたって以上のように理解できるだろう。しかし続けてベルクソンは次のように言う。

ところがより綿密に見ると、すべてのユニテは精神の単純な働きのユニテであること、そしてこの働きは統一すること (unir) を本質としているのであるから、何らかの多性が素材としてこの働きに役立っていなければならないということがわかるだろう。確かに私がこれらのユニテをそれぞれ別々に考えるときには、私はそれを不可分のものとして考えている。なぜなら私がそのユニテについてしか考えていないことは明白だからである。しかし、私が次のユニテに移るためにそのユニテを脇に置くやいなや、私はそれを客観化・対象化し、まさにそのことによってそれを一つの事物 (chose)、つまりひとつの多性にする。このことを納得するためには、算術が数を形成する際に用いるユニテは、無際限に分割されうる暫定的なユニテであるということ、またそれらの各々は思い浮かべる限り小さくまた数多くの分数的量の総和を構成するということを指摘すれば十分であろう。もしここで問題になっているのが、精神の単純な働きを特徴づけるあの決定的なユニテであるとすれば、どのようにしてこのユニテが分割されるだろうか。(DI60)

確かに 1 匹の羊は不可分で還元不可能なものとして考えられうるが、ここで決定的なユニテを成している 1 という数字も、算術の分野に持ち込まれると決定的なものでなくなる。

なぜなら 1 という数はここで、 $1/2 \times 2$ 、 $1/3 \times 3 \cdots \cdots 1/100 \times 100$ と無限に分割されるし、その時単位はそれぞれ $1/2$ 、 $1/3 \cdots \cdots 1/100$ となるからである。そしてその単位もまた、たとえば $1/2$ であれば、 $1/4 \times 2$ 、 $1/6 \times 3$ などとして置き換えられることが可能なのである。それゆえ先に決定的なユニテと呼ばれたものは、数学的な単位、算術において想定されているような単位ではないことになる。それでは、決定的なユニテとはつまるところどのような事態を指しているのだろうか。ベルクソンの次の記述は、それを理解するための手がかりとなりえるだろう。

私が 3 という数を形成する際に用いるユニテの各々は、私がそれに対して操作している間は一つの不可分なものを構成するように見えるし、私は先行するユニテから続くユニテへと一挙に移行する。(DI61)

一言で言えば、考えられているユニテと、考えられた後に事物に仕立て上げられたユニテとを、また形成途上にある数と、一度形成された数とを区別しなければならない。ユニテは考えられている間は還元不可能なものであり、数は構築されている間は非連続的なのである。しかし完成した状態で数を検討するやいなや数は客観化・対象化される。そしてまさにそれゆえに、数はこの時無際限に分割可能なものとして現れる。(DI62)

この二つ目の引用で言われている前者のユニテが決定的なユニテであり、後者のユニテが暫定的なユニテであるとする、決定的なユニテとはまさに形成の最中にあるところのユニテである。たとえば 5×3 を考えると、5 は 3 倍されるまさにそのときには一つのユニテとして不可分なものである。その「まさにそのとき」は算術においては考慮されない。算術は無時間的なものであるからだ。それゆえ、決定的なユニテは算術においては存在しない。しかしこのような決定的なユニテも、一度数として作り上げられて客観的なものとして定立されると、無限に分割可能な暫定的なユニテとなるのである。

第二章 数的多性と質的多性

「意識的諸状態の多性について——持続の観念」という章名も示唆しているように、『試論』第二章では数的多性 (multiplicité numérique) と質的多性 (multiplicité qualitative) という二種類の多性の対立を中心として、持続の観念についての議論が展開される。

要するに、二種類の多性を、「区別する」という語の可能な二つの意味を、そしてまた、同じものと異なるものとの間の差異についての、一方は質的で、他方は量的な二つの考え方を認めなければならないだろう。ある場合には、この多性、この区別、この異質性は、潜勢態においてしか数を含まない。それというのも、意識は、諸々の質を数えたり、さらにはそれらを複数のものにしようとしたりするいかなる底意なしに、質的差別化を行うからである。そのときにはまさに量なき多性がある。また別の場合では反対に、数えられたり、数えられうると考えられたりする諸項の多性がある。しかしそこで考えられているのは、これらの項を互いに外在化する可能性である。諸項は空間の内で展開されることになる。(DI90)

ベルクソンにとって、量とは一つの尺度・基準の大小で測れるようなもの、つまり長さ、大きさ、重さ、強度など、もろもろの測定に関わるものである。それに対して質とは、量的な尺度に置き直すことができないもの、互いに還元することができないものである。そしてベルクソンは、哲学者たちが本来質的であるものをそれと気付くことなく量的に思考してしまったがために、哲学上のさまざまな問題が誤って引き起こされた、と言うのである。質と量との間には、程度ではなく本性の差異がある。したがって、この二つの対立項を厳しく峻別して混同しないようにしなければならない。この質と量との差異が、議論が深まるにつれて二つの多性の差異へと重ねられていく。ここでは、第一章でのユニテの議論からその性質が必然的に導出される、純粋な持続に非本来な数的多性と、その数的多性とは対照的な本性を持つ、持続に本来的な質的多性について概観することにしたい。

第一節 数的多性とはなにか

第一章で述べたように、相互に同一とされる諸単位が積み重なることによって数が作られることになるのであるが、ベルクソンによれば、これを可能にするものはまず場としての空間 (espace) である。

精神に固有のものとして属しているのは、精神が自らの注意を継起的に所与の空間の多様な諸部分に固定する際の、不可分な過程である。しかしこのようにばらばらにされた諸部分は保存されて他の諸部分に付け加わるのであり、その諸部分は、一度それらの間で加算されてしまえば、どんな分解にでも委ねられることに

なる。よってこれらはまさに空間の諸部分なのであり、空間とは、精神がそれによって数を構成するところの素材（matière）、精神が数を置く場なのである。（DI63）

次の定義以外に、空間の可能な定義は存在しない。つまり空間とは、同一的で同時的な複数の感覚を互いに区別することを私たちに可能にするものである。（DI70-71）

言わなければならないのは、私たちが、一方で異質的な実在、感覚的質の実在、他方で空間たる等質的な実在という、二つの相異なる秩序の実在を認識しているということである。後者は人間の知性によってはっきりと考えられるものであり、これのおかげで私たちは、截然とした区別を施したり、数えたり、抽象したり、さらにはおそらく話したりすることができるのである。（DI73）

つまり諸単位が一つ一つ空間上の諸部分に局所化され並置されていくことによって、数が形成されるというのである。一つ一つ数え上げるということは、それら諸項の間に不連続が介入することを意味する。するとその枚挙の行為はもっぱら時間的なものであるというわけにはいかない。なぜなら、分断されて孤立した諸瞬間の各々は、それに先立つ瞬間を保存しないからである。そこに空間の必要性が生じる。時間は一瞬前に生じたことすら保存しないにもかかわらず、ある数にある数が加算されるには、前者の数が保存されていることが必要であるからだ。そのためにその保存の場として空間が必要となるというわけである。空間はそれが時間的なものではないという定義上、継起を本質とする持続とは対称的に同時性（simultanéité）を本質としている。それゆえ空間上では、次々に数えられた諸ユニテがすべて同時的に与えられており、それら进行操作して加算することが可能となる。つまり空間は諸項を明確に相互外在的なものにし、さらにその同時性によって、自らの上でそれらが互いに付け加わることを可能にするものなのである。とはいえ空間があれば数が形成されるに十分だというわけではない。そこにはさらに、後述する持続の働きが不可欠である。

数の構成が要求するのはまず、相互に判明な諸項が並べられることのできる等質的な場の直観、つまり空間の直観であり、次いで要求するのは、これらの単位が相互に動的に付け加わり、私たちが質的多性と呼ぶものを形成する際の浸透と有機化の過程である。この有機的展開のおかげで諸単位は付け加わるのであるが、それらは空間内に現前するから、互いに区別されたものに留まる。したがって、数ないし判明な多性もまた妥協（compromis）に由来するのである。（DI169-170）

相互に同一と想定された諸単位が等質的な空間上に並列されていくだけでは、それが加算されて何らかの数形成するには十分ではない。そこから持続の働きによって、諸単位が組み合わされて一つの数となる過程が必要となる。諸単位が「浸透」と「有機化」を経て一つのものとならなければならないのである。そしてこの過程によって初めて数が獲得されることになるが、このような数が持つ性質が数的多性と呼ばれるものである。（後述するように）持続は質的多性に重ね合わせて考えることができることを考慮すると、同じ多性と言っても、数的多性と質的多性の対比は対等なものではなくて、そこには非対称性がある。数的多性は空間と持続＝質的多性がなければ成立せず、よってそれは両者の「妥協」によって生じるという複合的な性格を持っている。

ベルクソンが『試論』で区別する二つの多性のうちの一つ、すなわち数的多性と呼ばれるものの性質は明らかになったであろう。それは、ここまで述べてきたような、空間に並置された相互に同一の諸単位が作り上げる数が持つ多性である。それは相互に明確な大小関係をつけることができるものであって、量的な性質を有している。数的多性は「物質的諸対象 *objets matériels*」（DI65）に関わる多性であり、それぞれの項が一つ一つ数え上げられ、また明確な輪郭を有して相互外在的であるような、「判明な多性 *multiplicité distincte*」（DI59）である。私たちが通常ものを数えるときに関与するのはこちらの多性である。それは質的多性のように意識に直接与えられたものではなく、持続と、人間の精神が形成する等質的空間とによって成立する二次的なものである。

第二節 質的多性とはなにか

そしてベルクソンが意識的事象の有する多性として数的多性に対置するのが、質的多性あるいは内的多性と呼ばれるものである。ベルクソンの根本概念である「持続 *durée*」はこの多性にあずかっており、『試論』では持続あるいは持続する意識にのみ、この多性は属している。

要するに、純粋な持続とはまさに、相互に溶け合い、浸透し合い、明確な輪郭をもたず、互いを外在化しようとする傾向を全くもたず、また数とは何の類縁性ももたないような、質的諸変化の継起でしかありえない。それは純粋な異質性であろう。（DI77）

私たちの内にある持続とは何であろうか。それは数とは類似性をもたない、質的多性である。それは有機的展開であるが、しかし増大する量ではない。それは純粋な異質性であり、その中には諸々の判明な質があるのではない。要するに、内的持続の諸瞬間は互いに外在的ではない。(DI170)

「質的」という言葉が「不分明な indistinct」とも言い換えられる²ことが示しているように、質的多性そのものとも言える純粋な持続においては、諸々の項が明確な輪郭を持って相互に外在的なものとしてあるのではなく、互いに融合し合い浸透し合い、繋がり合うことによって組織化され、連続し合うことになる。このようなあり方は「諸要素の相互浸透、一体性、内的有機化」(DI75)とも表現される。そうした諸状態は各々が全体から規定され、同時に全体を反映してもいる。それは一瞬ごとにその質を継起的に変化させ続け、決して同じ状態に留まり続けることはない。上の引用で言われている「異質性 *hétérogénéité*」とは、前述の数的多性が形成される場である空間を表す「等質的 *homogène*」という性質と対を成す性質であり、それを備えた諸要素が、それぞれの色合い、ニュアンス、質を異にしているような事態である。ゆえにそれは数的多性における単位のように「重ね合わされる juxtaposition」(DI58)ことを許さない。そして持続においては意識的諸状態が有機的展開として連続し、一つの異質な全体を形作っているのであるから、それはそのままでは等質的な空間のような恣意的な分割を許さず、もし分割されて諸部分に分けられ、量的あるいは数的なものになってしまうと性質を一変させてしまうものである。「質的多性は潜勢態においてしか数を含まない」という文言はこのような意味で理解することができる。

このような質的多性、そしてそれが構成する持続の異質性は、メロディーの比喻を使って説明される。メロディーにおけるある音は、それだけを孤立させてしまえば単なる一つの音である。しかしメロディーの中で音が独自の質を持つのは、その前後の音、つまりその音までの音の連なり、またその音より後の音の連なりとの関係においてのみである。メロディーの諸々の音は互いに繋がり合うことによって一つの曲として有機化され組織化される。その中でそれぞれの音は独自のニュアンスや価値、意味をまとう。これはあくまで比喻であるが、ベルクソンが持続する意識の事象に与えた多性は以上のようなものであり、ベルクソンが真に実在的としたのはこの質的多性である。

この質的多性は容易に、だがそれと気づかれることなく数的多性へと変質する。それを具体的に示すためにベルクソンが例として用いるのが、人が鐘の音を耳にする場面である。私たちが継起的に鳴る鐘の音を聞くと、その時間的な流れに身を任せていれば、「私はこれらの継起的諸感覚の各々を保持し、さらにそれらを他の諸感覚と有機化し、すでに知られた旋律やリズムを思い起こさせる一つのグループを形成する」。そのとき私たちは「音の数が私に与えるいわば質的な印象を取り集めている」(DI64)のみである。つまりこの

ようなとき私たちは、たとえば鐘が五度鳴ったとして、しかしその回数を明確に意識することなく、まさに四度鳴ったときとも六度鳴ったときとも異なるような、独自の質、独自の印象を獲得するというのである。

しかし私たちがその鐘が何度鳴ったのかを数えようとするとき、このような固有のニュアンスは喪失してしまう。数えるためには、「私はそれらの音を切り離さなければならないし、この切り離しは何らかの等質的な媒体の内になされなければならない」(DI64-65)のであって、この等質的な媒体において「音は質を剥奪され、いわば空虚にされる」(DI65)ことになる。「等質的な媒体」たる空間によってそれぞれの音の間に間隙が作られ、相互に判明なものとなる。それらが持つ持続的な性格は消え失せ、同時性を本性とする空間という一つの平面上に並置される。五度の鐘の音が四度の鐘の音、六度の鐘の音と異なるのは、ただその回数だけである。一つの「同じ」音がいくつ並べられるかの違いでしかない。私たちはこのようにして、直接意識に与えられた持続としての質的多性を、知らず知らずのうちにいわば「空間化」し、数的多性へと変えてしまうのである。

第三章 内的持続の統一について

持続について考えるとき、質的多性が意識に直接与えられたものとして持続を成しているとする、いかなる根拠で一つの持続、もしくは一つの持続する自我が成り立っているのだろうか、という問いが生じてくる。私が私の自我を一つの自我であると言うことができるためには、ただ多性があるのみでは十分ではないだろう。そこには多が一つのものとして成り立つための統一という契機が求められる³。そのためここでの「一」をめぐる問題は「自我の統一」という問題として立ち現われてくるはずである。

しかし『試論』第二章のタイトルが「多性」という言葉を含み、実際に二つの多性が主題として論じられていたのとは異なり、多に対しての一について、少なくとも表立っては論じられていないように思われる。しかしそうであるからと言って、ベルクソンがこの問題について何ら目配りをしていなかったと考えるのは早計である。

このような過去の諸状態が言葉によっては適切に表現されえず、またより単純な諸状態の並置によって人工的に再構成することもできないのは、それらの諸状態が、その動的な統一 (unité dynamique) とその全く質的な多性において、私たちの実在的で具体的な持続、異質的持続、生きた持続の諸局面 (phases) を表しているからである。(DI179)

この「動的統一」という言葉に注目したい。やはりベルクソンは、この「動的統一」について明確な定義を施したり詳細な議論を行ったりしているわけではない。しかし『試論』第二章の質的多性及び持続についての考察から、この「統一」の実質がどのようなものであるかということは、おのずと浮かび上がってくるのではないだろうか。ここでは、いかなる意味で持続が「動的統一」と言えるのかを明らかにしたい。アンリ・グイエは持続における一と多について踏み込んだ解釈を行ってはいないが、以下のような簡潔で当を得た記述を残している。「プロティノスの言うように、数でない一者は存在者を超越している。ベルクソンの統一は存在に一致しており、またこの存在は生成なのであるから、この統一は、この事実によってこれもまた数であることをやめる多を含んでいる。第一原理としての一者は問題になっていない。非数的統一と多性はたんに意識の直接与件なのである。」⁴ 本章で行われる考察は、このグイエの言葉の内容を明確にすることでもあるだろう。

自我の「動的統一」とは何か。結論から先に言ってしまうと、それは質的多性としての持続の在り方そのものである。私たちの意識的諸状態は、それが純粋に質的なものであれば、相互に浸透し合い融合し合い、互いに輪郭を持たず、それぞれが区別し難いような仕方で混じり合い、一つの全体的な人格を形作っている。それは「メロディーの一節が有する統一に似た統一」（DI83）と言うべきものである。したがってこの統一は、多なるものを外からまとめあげるような統一、まとめあげるところの多とは独立しているような統一ではない。ベルクソンにおいて考えられている統一とは、意識に直接与えられた持続の質的多性がおのずから作り上げるような統一である。言い換えれば、多性が質的であることがそのまま統一を意味することになる。それぞれの意識的諸状態がまさに質的であるがゆえに有機化・組織化されて、自ら全体を形作るというのが持続の統一性である。

このようなベルクソンの統一をさらに明確に特徴付けるためには、それをカントの自我論と比較することが有効であるように思われる。ここでは『思想と動くもの』に収録された「形而上学入門」において、カント主義を思わせる合理論による自我論に対してベルクソンが加えた批判を検討し、さらに傍証として、ベルクソンによって 1893-94 年にアンリ四世校でなされた「『純粹理性批判』についての講義」の中から、「超越論的分析論」に加えられた解説を参照する。

『形而上学入門』の「合理論と経験論」と題された節の中でベルクソンは、この二つの立場がともに「自我」を獲得しようとして失敗していると述べる。ベルクソンによれば、両者ともに、何か固定的な自我の統一というものをあらかじめ想定して、それに到達するために多数の自我の断片とされる心理状態をつぎはぎして自我の再構成を図るが、そのような作業をいくら重ねても、心理状態の集合以上のものが出てくることはない

(PM194-195)。ここから経験論と合理論とが袂を分かち。経験論がここで歩みを止め、自我は心理状態の寄せ集めでしかないと宣言するのに対して、合理論はなおも自我に固執し、それを観念的にこしらえようとする。そうして作り上げられた自我の統一性なるものは、「純粹に否定的なもの」、「一切の規定の不在」、「絶對的に未規定のもの、絶對的に空虚なもの」(PM195)でしかなく、私たちが自らの内奥に感じるような、生きて実質を持った自我とはかけ離れたものである。自我の一と多とはここで全く分裂してしまっており、多なる心理状態とその集積たる一なる自我とを概念的に整理したいという欲求によって仕立てられたものにすぎない。上で述べたような「動的統一」、持続の質的多性が内的に結合することによって自ずと形成される統一を實在とするベルクソンにとって、このような事態は決して容認できるものではない。

「『純粹理性批判』についての講義」の中でも、これとほとんど同じ趣旨の、しかしより詳細なカント批判が展開され、さらにベルクソンの統一が積極的な形で語られている。ここでベルクソンは、カント的な「思惟の外的で表面的な統一」と、「もはや多様なもの (diversité) に内的であって外的でないような生きた統一」⁵とを対立させている。ベルクソンは、カント的な経験的認識を、多から一へと向かうものであると述べる。「多から一へ」とはすなわち、私たちの経験が生じる際、まず感性を通して多様なものを受容し、それらを悟性によってカテゴリにいわば当てはめて総合し、「われ思考す」という統覚の根源的統一のもとに一つの現象として定立する、あの一連の過程⁶のことである。この過程の中で私たちは、多様なものを結合するための束を作るように強いられる。それはその多様なものとは全く異なる出自をもち、その外部からやってくるものと言えよう。よって私たちが多様なものに課さなければならない統一は、「平凡な形式、この形式が適用される多なる諸現象がどんなものであろうとも同一のままに留まる形式、つまり生氣のない形式」、「空虚な形式」⁷でしかない。ここにおいては「一」と「多」はまさに対立する概念として措定されており、両者は現象の認識を成立させるためだけに要請される道具立てという以上の存在論的な地位を持ち得ない。

それに対してベルクソンが言うような根源的統一を持つことができるのは、私たちの認識が一から多へと向かう場合である。言い換えると私たちがその統一の中に到達することができ、そこから多なる現象が繰り広げられる場合である。

私の存在、私の人格のいわば本質に私が到達することができると仮定してみよう。私が自己に (en soi) 達すると仮定してみよう。自己のすべての現れを産出する限りにおいて、現象を産出する限りにおいて、私は自己を把握する。そのときには私は自己の生きた統一の内にあり、そしてこの統一から様々な現象が発し、花開いていくことになるであろう。⁸

私はまず根源的統一のうちに身を置き、そこから多様な現象を産出する。このことは先ほど述べた、純粋な持続においては一と多とが同じ事態を意味するというものと矛盾するものではない。私たちは質的多性が有機化して統一を成す持続のうちにあり、そこから持続が進展するにつれて新たに要素が付け加わって質的多性を成し、それがまた時々刻々と持続の統一を更新し続け、このプロセスが無限に継続していくからである。

もはやここで言われている二つの統一の差異は明らかである。カントにおける統覚の総合的統一は、感性に与えられた多様なものを総合することに関与するものである。それは超越論的で経験を可能にするものではあるが、それ自体は経験されえないという意味で経験に外的なものである。それに対して、「真の経験論」に立ち、「精神的聴診」によって「魂が脈打つのかを感じ取る」(PM196)ことを目指すベルクソンが実在的とする統一は、私たちが持続する自我の深層に立ち返れば覚知されるものである。質的な多性それ自体が何か他の原理に頼ることなく独力で統一を成すという意味で、この統一は多様なものに内的であると言えるのである。それは多を外からいわばまとめあげるような概念的装置ではない。そこには何か持続とは別のスタティックな契機は存在しないのである⁹。そうであるから、ベルクソンの統一は統一されるものに対して内在的である、と言ったのでは実際には十分でない。統一するものが、統一される質的な多の「内に在る」という構図をとるわけではないからだ。それは多がその性質からして必然的に自ずから成すような統一なのである。

そしてベルクソンの統一が「動的」であるのは、持続が絶えず変化することにかかっている。持続が進展するにつれ、その全体は一瞬一瞬様相を変え続け、ひと時も同じ状態に留まることがない。それは次々に継起的に与えられる所与を総合する固定的な原理のような統一ではない。統一そのものがつねに動いているのであって、統一に付される「生きた (vivant)」という形容詞はこのような性質を言い換えたものであろう。

このように考えてみると、動的統一＝動的ユニテは、第一章で考察した「決定的なユニテ」に関わってくるものであると考えることが可能となってくるのではないだろうか。動的統一を成す持続においては、瞬間ごとに、時々刻々と新しい要素が加わって全体の質を変容させ、かつすべての諸要素が相互浸透し合い溶け合って、持続という一つの全体を成している。それは常に形成途上のものである。この「決定的なユニテ」としての持続が、諸ユニテを結びつける働きとして作用するのである。

第四章 内的持続の多性について

本章では持続を、それを構成するユニテの概念から解き明かすことによって、その内部構造がいかなるものであるかを示したい。私がここで導入すべきであると考えるのは、本稿第一章で行ったユニテの議論である。持続が連続的で統一性を有したものでありながら、なおそれを「多性」と呼ぶことができるのは、持続が「持続のユニテ *unité de durée*」により構成されているからだと考えられるからである。

この「持続のユニテ」の概念について気づかせてくれたのはセバスチャン・ミラヴェットの研究¹⁰である。彼はそこで持続を数として捉えようとするのであるが、その際持続が数であることの根拠としてこの概念が持ち出される。もちろん数とは言っても、持続と空間とは全く本性を異にするものであるから、それは空間による相互に完全に同一な諸単位が形成する数的多性の数とは違うものである。彼によれば、このような数的多性の単位とは異なり、持続という数を成す単位は、空間による作用を免れているために相互に同一のものでなく、それゆえ質的であって連続している。諸単位が相互に同質でないときには空間が介在しておらず、このとき諸単位が何らかの構造を成せばそれは空間を介さずとも数的であり、したがってこのような諸単位によって構成される持続は数的であると、彼は言うのである¹¹。

本章の議論はミラヴェットのこの成果に教えられるところの極めて大きいものであり、またこれに賛同するものである。ただ彼はこの「持続のユニテ」を『試論』第二章冒頭のユニテの議論と詳細に比較して論じるということはしていない。私はここで彼の研究を受け継いでさらに一歩進めることにしたい。

第一節 科学的時間と持続的時間

「持続のユニテ」という言葉が使われるのは『試論』第三章の「実在的持続と予見」という節においてである。そこでベルクソンは、天体現象を予測することを可能にしている人間の思考の特性が、持続の発展を十全に捉えるのを妨げているということについて論じている。ここでは天文学をはじめとした科学で扱われるような時間と、私たちの意識に直接与えられたものであるところの持続とが対比させられている。そしてこの二つの相違を明確にするために、デカルトの悪しき霊が、宇宙の全運動に対して二倍の速度で進むよう命令したという状況を想定しているところが、以下の引用である。

というのも、このような方程式においてシンボル t は、持続ではなく二つの持続のあいだの関係、いくつかの時間のユニテ、というよりもむしろ、結局はいくつかの同時性を指しているからである。こうした同時性や合致は、なお等しい数だけ産出されるであろう。それらを分離する間隔だけが減少したことになるだろうが、しかしこのような間隔は計算とはいかなる関係もない。ところで、これらの間隔こそまさに生きられた持続、意識が知覚する持続なのである。それゆえ、もし日の出と日の入りとのあいだで私たちがより少ない持続を持ったとすれば、意識はすぐに一日の減少を私たちに告げるだろう。意識はおそらくこの減少を計測するのではないだろうし、すぐさまこれを量の変化という相の下で覚知するのではないだろう。しかし意識は何らかの形で、存在の通常の豊穡さの低減と、日の出と日の入りとのあいだでいつもは実現されていた進展の変容とを確認するだろう。(DI145-146)

一方の科学的時間は、ベルクソンが『試論』を通して終始批判を加えている、空間化された時間、等質的時間である。それは等質的で同時的な空間の観念を、本来異質的なものである時間に適用して、そこから質的なものを除去することによって獲得されるものである。そこでは等質性がすべてを支配しており、ある一分と別の一分とは、それが数直線上に占める位置の他には何ら差異を持たない。たとえば天文学は、月の 10 時間後の位置を予見するにあたり、月の軌道の計算式をもとに、あたかも 10 時間が過ぎてしまったかのよう¹²にシミュレートを行い、求められる位置を割り出す。その際現在から 10 時間後までの間に生じる出来事については、何らの関心ももたれないし、時間に特有のものである「流れる」という契機は考慮に入れられない。現在の月の位置と 10 時間後の月の位置だけが問題となるのであり、その間隙は減少させられたとしても計算には何の影響も出ない。科学的時間は全く等質的なものであり、10 時間が 5 時間に半減したところで、運動のスピードも二倍になっていて、その時間が計算の上で有する意味に変化はないからである。このように科学の扱う等質的時間は、いくらそれを自由気ままに加工しようとも、その本性を変えることのないものである。

それに対して生きられた持続は、その純粋な形においては全くの異質性である。そこに等質的なものが入り込む余地はなく、一切が一切に対して相互に本性を異にするという存在様式を有している。そこではある一分と全く同一である他の一分が存在することはありえない。それは決して切り詰められることの許されないものであり、ある持続が半分にされてしまえば、まさにその短縮ということによって性質を一変させてしまう。物理的には同じ出来事が同じ順序で生じていたとしても、その間に経過する時間間隔が異なれば、それを生きる持続はもはや異なるニュアンスを備えた異なる持続である。よってもし宇宙の

全運動の速度が上昇したとしたら、持続する意識はそれを感知するはずである¹³。科学が相手にするのはある時間とある時間との間の両端だけであったが、持続が生きてのはまさしくその間隙であり、そこで流れているものこそ意識が直接的に捉えているものである。

第二節 科学のユニテと持続のユニテ

それでは、以上で述べたような二種類の時間観念の差異はどこに由来するのか。この差異は、それぞれの時間を構成している単位としてのユニテの性質の違いに帰着することになるように思われる。このことは、とりわけ持続についてユニテを言うことは、一見奇妙なことであるように見える。なぜなら、持続は一つの全体を成しているはずなのに、それが多数のユニテの集合、それらの総和として形成されていると考えてしまうと、あたかもそれが分割可能なものであるように解されてしまうからである。持続は連続性をその本質の一つとしているにもかかわらず、「持続のユニテ」という考え方によってユニテ間の断続が生じてしまい、そこに非連続性が導入されてしまうのではないか。このような疑問が発せられるかもしれない。しかしそうではない。次に引用するのは、先ほど述べた二つの時間観念に加えて持続のユニテについても言及している文章である。

しかし時間のこうした諸ユニテは生きられた持続を構成していて、これらを天文学者は、これが科学に全く手がかりを与えないからと言って、彼等の好きなように利用しているが、この諸ユニテこそまさしく心理学者の関心を引くものなのである。というのも、心理学はもはや間隔の両端にではなくて間隔そのものを対象とするからである。確かに純粋な意識は時間を持続の諸ユニテの総和の形では覚知しない。〔中略〕しかし、たとえば持続する日数が半分になった感情であれば、それはもはや意識にとって同じ感情ではないだろう。その感情には意識のこの状態に対して、それを豊穡化しその本性を変容しにくる多くの印象が欠けているだろう。(DII47)

持続としての時間がユニテによって成り立っているとベルクソンが考えていることそれ自体は、この引用から明らかであろう。持続のユニテは科学的手段によっては、つまり等質的な時間に対しては有効であるような、計算の便宜のために切り刻んだり伸縮したりする操作によっては、その本性が遠く見失われてしまう性質のものである。しかしそれが実際にどのようなものであるかということについては、ここだけでは不詳のままに留まる。

ここで思い起こすべきは、本論文の第一章で検討した二つのユニテ、つまり「暫定的なユニテ」と「決定的なユニテ」ではないだろうか。つまり暫定的なユニテは科学的時間におけるユニテであり、決定的なユニテは持続におけるユニテなのではないかということだ。

簡単に振り返ると、暫定的なユニテとは、自らの内に多を含み込みながらも、全体がーとして表象されるものであった。それはすでに出来上がったものとしていわば静的なユニテであり、いくらでも諸部分へと分解することが可能である。それは典型的には、算術の計算において使用される数である。もう一つの決定的なユニテとは、他の何ものにも還元することができず、分割不可能な一性であった。これが積み重なることによって数が構成されるのだが、重要なことは、このユニテがそのようにしてすでに構成されてしまった数とは本性を異にするものであるということだ。確かに決定的なユニテは数を構成するが、構成された数は決定的なユニテではない。この区別が肝要である。決定的なユニテは、それがつねに形成途上のものに関わっている限りにおいて決定的なのである。

このように見てみると、暫定的なユニテが科学的時間におけるユニテに等しいと見ることはもはや難しいことではない。両者は同じ構造を共有している。そこからは時間が「形成途上」であるということ、「流れつつある」ということが排除されている。それは出来上がった対象として客観化され、いかようにも操作可能なものである。それと並行して、このユニテからは質的なものがすっかり抜き取られて全くの等質的なものとなっている。この種のユニテは相互外在的で、一方は算術的な計算において判明な数という役割を演じ、他方は数直線によって表現されるような時間概念を作る。そして羊の例で見たように、各々のユニテは異質性を欠いており、それぞれに独自の性質は抽出され、すべてが同じものとして一つの一般的枠組みに組み入れられている。そうであるからこそ、このユニテによって築き上げられたものは同質的であり、天文学がそうするように、伸縮可能なものとして表象されることになる。数直線上の点と点とは互いに明確に区別され、またそれが占める位置を除いては互いに同質的なものであり、線はそれらの点の集合とみなされる。このような意味で、科学的時間のユニテは暫定的なユニテと性質を同じくするものであると言えることができる。

さらに決定的なユニテと持続におけるユニテとは同じものを指していると考えることができるだろう。純粋な持続における諸要素は、連続し合い融合し合って一つの全体を形成していながら、それと同時に質的多性を成し、互いに異なるものとして存在している。この諸要素のそれぞれをユニテと捉えるならば、このユニテは互いに異質的であることになるだろう。このユニテはそれ自体不可分のものであり、与えられたままの姿を歪めてしまえば、もはや前と同じ性質を維持することはできない。そうした一つ一つのユニテが組織を成すことによって、意識の持続全体が構成されているのである。このユニテが決定的であると言えることができるのは、それが持続を構成するものとして、時々刻々と絶えず持続の全体に新たに付け加わり、その全体の相貌をつねに変え続けていくような、形成途上の

ものであるからである。以上のような意味で、決定的なユニテ＝持続のユニテは質的多性を構成していると言うことができるだろう。

持続のユニテに関して注目すべきは、その「相互可入性」という特性である。科学的時間においては、たとえば 10 秒は、1 秒という単位が 10 個合わさった総和として、きっちり 1 秒の 10 倍の時間として定義されるし、またそのように扱われ処理される。そこでは全体が各項の総和と一致している。しかし持続のユニテはそうではない。上の引用にあるように、「純粋な意識は時間を持続のユニテの総和の形では覚知しない」からである。そうであるためには、持続の構成要素たる諸ユニテは、互いに浸透し合い重なり合うのでなければならない。実際ベルクソンは、質的多性における「不可入性 *impénétrabilité*」の否定について言及している。私たちが科学的な視点から事物に関わるときにのみこの「相互不可入性」が有効なのであって、それは「物理的次元の必然性ではなく、論理的必然性」(DI66)によっている。

したがって物質の不可入性を措定することは、たんに数の観念と空間の観念との結びつきを認めることであり、物質の特性というよりむしろ数の特性を述べることである。——しかしながら、感情や感覚、観念、相互に浸透し合い、各々の側から魂全体を占めるようなすべての事象 (*choses*) は、数えられているではないか。——確かにその通りである。しかしまさにこれらの事象は相互に浸透し合っているのであるから、それらが数えられるのは、空間内で区別される場所を占めるような等質的諸ユニテ、もはや相互に浸透し合わない諸ユニテによってそれらを表象するという条件においてのみである。それゆえ、不可入性は数と同時に出現する。(DI66-67)

物質の「不可入性」は、数的多性及びその基礎となる空間の概念と緊密に関連したものであり、それを存在のための条件としている。なぜなら私たちはそこにおいて個々の要素の明確な輪郭と、それによって担保される「相互外在性」とを認識するからである。そこではすべてが空間という等質的な媒体の上に並べ置かれ、他とは違うものとして明確に区別されることになる。当然二つ以上の項が同じ位置を占めるということとはありえない。しかしこれに対して、感情・感覚・観念といった持続における要素は、「不可入性」にしばられることがない。それらは互いに溶け合い入り込み合っているからである。それらは各々自らと他とのはっきりとした境界を有していないから、一つずつ数え上げられるような判明な数を形成することはなく、どれがどれとも言えないような仕方でも共在している。そうになると持続においてはある意味で、二つ以上の要素が同じ位置を占めるという事態が生じてくる。このように、数的多性と質的多性との差異、及びそれぞれに関与するユニテの差

異は、一方が「相互可入性」を許さないのに対し、他方が「相互可入性」を許容している、いやむしろこれを本質としているということにあるのである。

おわりに

本稿では『試論』における持続の一と多を、「ユニテ」という概念から明らかにした。ベルクソンが持続に本来的であるとした一と多は、それぞれ動的統一と質的多性である。持続は多なるものとして、互いに重なり合い浸透し合う単位としての諸ユニテによって構成されるものであると同時に、それらの諸ユニテが繋がりが合って統一としてのユニテを成すという意味で一なるものである。したがって、持続においては一と多とはそれぞれ独立した別々の事態なのではない。この多性と統一とは結局同じことを意味しているのであり、持続の多性を重視するか、統一性を強調するかの違いで表現が変わってくるに過ぎない。持続はユニテによって構成され、そうして構成された持続もまたユニテである。本稿はこのような整理することができるだろう。

このようにベルクソンの持続理論は、一元論か多元論かのどちらか一方にカテゴライズしてしまえるような性質のものではない。それは、個別的な多なるものを、その背後に超越的に存在する統一的原理へと還元してしまうような観念論的一元論でもなければ、そのような多や個物のみが経験に対して与えられているという根拠によって、それらを統括する一なるものの存在を否認する経験論の多元論でもない。そしてまたそれは、多がその外部に由来する一によってまとめあげられるとして一と多の実在性を肯定しはするが、しかし一と多とを異なる次元に設定することによって両者の関係を相互に独立的なものにしてしまうような理論でもない。ベルクソンによれば、そのようにして考えられた一と多はいずれも空虚で人為的なものであり、私たちによって生きられたものではない。ベルクソンが実在的であり私たちの持続に本来的であるとする一と多は、互いに分かち難く結びつき、両者のどちらか一方だけを切り離して論じることができない。というより、多がそのままで一、一がそのままで多であるような一と多である。多が一を成し、一が多を成し、それらが持続において絶えず動きつつ変容していく。これがベルクソンの存在論である。

本稿では基本的には議論を『試論』に限って行ってきたが、ここでなされた持続の「一と多」についての思索は後のベルクソン哲学を貫くものである。次の著作『物質と記憶』（1896）で持続は「記憶力 *mémoire*」として語り直されることになるのだが、この「記憶

力」という領域において、「一と多」の問題が過去の諸々の「記憶 *souvenir*」やそれらが織り成す「人格 *personnalité*」といったトピックを通して、新たな形で継承されている。また『物質と記憶』のもう一つの重要な論点として、『試論』では内的意識にのみ認められていた持続が外的世界にも拡張されるようになり、それに伴って外界の物質は「具体的ひろがり *étendue concrète*」として捉えられる、ということが挙げられる。「具体的ひろがり」は「連続的で多様化されながらもまた同時に有機的」（MM208）で、「もろもろの感覚的質の多様性」（MM244）とされる。持続する諸事物は質的多性であると同時に、互いに連続的に繋がって物理的世界という一つの統一体を成す。本稿で見た『試論』の「一と多」という問題はここにも引き継がれている。

また個々人の持続として『試論』で扱われていたものが、『創造的進化』（1907）では一切の生命体を貫いてその底に流れているような「生命の躍動 *élan vital*」としてより壮大なスケールへと移されていき、そこからさらに宇宙論へもつながっていく。「生命は多なるもののカテゴリにも一なるもののカテゴリにも全く入らない」（EC179）、「私は多なる統一であり、また一なる多性である」（EC258）、「生命の躍動は純粋な統一でも純粋な多性でもない」（EC261）と言われるように、さほど目立たない形ではあるが、『創造的進化』の根本的な概念を語るにあたり、確かに「一と多」の問題が一つの参照軸とされている。

また論文集『持続と同時性』（1922）、『思想と動くもの』（1934）においても、この問題に関して極めて重要な議論がなされており、ベルクソンが扱う様々な事柄の根底に「一と多」への意識が一貫して流れていたとすることができるであろう。ベルクソン哲学全体をこの「一と多」を巡る思索の発展として読み解くということもできるかもしれないが、紙幅の限界と何より著者の力量不足から、これは今後の課題とするよりほかない。

凡例

ベルクソンの著作からの引用・参照には以下の略号を用い、略号の後ろの数字はPUF,Quadrige 版の頁数である。

DI=*Essai sur les données immédiates de la conscience* （邦題：『意識に直接与えられたものについての試論』）

MM=*Matière et mémoire* （邦題：『物質と記憶』）

EC=*L'évolution créatrice* （邦題：『創造的進化』）

PM=*La pensée et le mouvant* （邦題：『思想と動くもの』）

注

¹ “unité”というフランス語は多義的である。この言葉は「数を形成する単位」という意味のみに解されるべきではない。後述するように、ベルクソン哲学において、それは数の単位を意味するものでありながら、かつ持続の統一を指すと同時に、多として持続を構成するもの、及び多が自らを統一する働きとしても考えられなければならない。そのためそれが単位や統一を明らかに指示していると考えられるときにはそのように訳しているが、複数の事柄、あるいはベルクソン哲学に独自の事象を意味していると考えられるときには、フランス語の読みである「ユニテ」と訳すこととする。

² 「不分明な、あるいは質的な多様性」(DI78)。

³ なお自我の統一という問題を、精神の働きとしての総合、つまりたとえばある物体の諸位置を総合して一つの運動として成り立たせる総合の問題と重ねて論じる研究者もいる(Cf. 杉山直樹『ベルクソン 聴診する経験論』創文社、2006 年、89-92 頁)。しかし自我が一つのものとして統一性を有しているということと、自我が一つの運動を、統一性を持ったものとして認識することとは、確かに同じ問題圏に属する事柄ではあろうが、やはり同一視できるものではないように思われる。本稿では二つを区別し、統一の問題としては前者を扱うこととする。

⁴ Henri Gouhier, *Bergson et le Christ des Évangiles*, Paris, Vrin, 1987. p. 57.

⁵ とともに Bergson, *Cours, tome 3*, Paris, PUF, 1995, p. 173.

⁶ 「感性との連関全ての直観の可能性の最高原則は、超越論的感性論によれば、直観の全ての多様なものは空間と時間の形式的諸条件に服しているということである。悟性との連関における全ての直観のまさに同じ可能性の最高原則は、直観の全ての多様なものは統覚の根源的・総合的統一の諸条件に服しているということである」、「感性的直観に与えられた多様なものは必然的に統覚の根源的な総合的統一の下に属する」。(Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Hamburg, Felix Meiner, 1998, p. 181, p. 186.)

⁷ Bergson, *Cours, tome 3*, p. 166.

⁸ Bergson, *Cours, tome 3*, p. 168.

⁹ フレデリック・ヴォルムスはベルクソンの自我の一性を担保する働きを、スピノザ的な「力 force」や、ニーチェの言う「力への意志」になぞらえている。これらとベルクソンの自我の一性は、確かにカント的自我とは異なって内在的に存在しているという点で近いものと言えるかもしれないが、しかしベルクソンにおける自我の統一は、異質性を有した持続の諸々の要素がそのまま織り成す統一であって、そこに質的多性と別のものを必要とするわけではないという点でやはりそれらとは別種のものであろう。(Frédéric Worms, *Bergson ou les deux sens de la vie*, Paris, PUF, 2004, p. 85.)

¹⁰ 2012 年 10 月 19 日に京都で行われたベルクソン国際シンポジウムにおける”Spencer, Renouvier: comment Bergson a-t-il inventé la durée ?”と題された発表。

¹¹ 「数としての持続」というアイデアについて、ミラヴェットは以下の論文でさらに詳細に論じている。Sébastien Miravéte, «La durée bergsonienne comme nombre spécial», dans Frédéric Worms (ed.), *Annales bergsoniennes V*, Paris, PUF, p. 403.)

¹² 「ベルクソンのさまざまな考察において重要なのは、「過去・現在・未来」の区分である

よりも、まずは「未完了・完了」の差異である」(杉山直樹『ベルクソン 聴診する経験論』創文社、2006 年、79 頁)。

¹³「しかし、時間の間隔を切り詰めるとは、そこで互いに継起する意識の諸状態を空虚化し貧困化することでなければ、いったい何であろうか。そしてこのように、天文学的期間を短くして見るものの可能性そのものが、同じ仕方で心理学的系列を変容させることの不可能性を含んでいないだろうか。なぜなら、この心理学的系列を不変の基盤として捉えることによってのみ、持続のユニテに関して天文学的期間を恣意的に変動させることができるだろうからである」(DI148)。